東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

音大生のための英語プログラム（English for Music Students, EMuS）構築に向けて：内容言語統合型学習（CLIL)と特定の目的のための英語（ESP)に基づく英語授業への提言

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-02-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 早坂, 牧子, Hayasaka, Makiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1443

音大生のための英語プログラム（English for Music Students, EMuS）構築に向けて：内容言語統合型学習（CLIL）と特定の目的のための英語（ESP）に基づく英語授業への提言

早　坂　牧　子

東京音楽大学研究紀要　第45集　－2021－

音大生のための英語プログラム（English for Music Students, EMuS）構築に向けて：内容言語統合型学習（CLIL）と特定の目的のための英語（ESP）に基づく英語授業への提言

早坂牧子

1. はじめに

本稿の目的は、内容言語統合型学習（Content-Language Integrated Learning, CLIL）と特定の目的のための英語（English for Specific Purposes, ESP）の考え方を参照しながら、音大生のための英語プログラム（English for Music Students, EMuS）を構築する可能性を探ることにある。

他の多くの大学同様、音楽大学においても、グローバル化の加速する現代社会で活躍する人材育成を目指し、英語を必修科目としている。しかし、では国際的な音楽の現場において実際に役立つ英語の能力を学生に養成できているかというと、疑問であると言わざるを得ない。留学や仕事で、いざ様々な国の音楽家たちと協同する環境に足を踏み入れてみると、それがドイツであれフランスであれイタリアであれ、英語でのコミュニケーションが不要となることはなく、議論についていけずに悔しい思いをしたという話はよく聞く。音楽大学のカリキュラムでは、英語コミュニケーション、ライティング、文法、原典講読、資格試験などの英語科目が設けられており、中には音楽を通じて英語を学ぶ授業が選択できる場合もあるが、英語を使って音楽作品、音楽を取り巻く文化や、音楽の現場で必要なコミュニケーションを実践的に学ぶ授業が必修となっているケースは殆どみられない。国際的な演奏・創作活動を目指す学生ばかりではないが、どのようなキャリアを歩むにしても今や英語は避けて通れないし、英語を使って音楽の仕事をしたり、音楽の情報を得たり発信したりする力があれば、職業的な選択肢は広がるだろう。医療や科学、法律、観光などの専門分野で、これらに特化した授業実践や教科書の作成が進んでいることを考えると、音大生のための音楽に特化した英語教育プログラムがもっと構築されてよいはずだし、学生が専門科目で学んでいる内容と英語の授業の内容が少しでも接続していれば、科目横断的な学びにもつながるのではないだろうか。筆者は、英国で音楽学の学位を取得した後、本学をはじめいくつかの大学で英語と音楽史の授業を日英両語で行ってきたが、自分自身と周囲の音楽家たちの経験、受け持つ学生の様子を見ていても、英語そのものを学ぶことと並んで、英語を用いた統合的な音楽の学びが今後より必要とされるのではないかという思いを強くしている。

音大生のための英語プログラム（EMuS）のデザインに向けて、重要な枠組みであると思われるのが「内容言語統合型学習」（CLIL）と「特定の目的のための英語」（ESP）である。本稿では、音楽大学において既に実践されてきたCLILもしくはESPを用いたティーチングの試

みを参照しながら、音楽大学の英語授業におけるCLILとESPの有用性を考える。また、実際の教授内容を検討する第一歩として、CLILとESPを取り入れたEMuSのコース・カリキュラムのモデルを提示する。

2. なぜ音楽大学でCLILとESPなのか

2.1 先行研究とこれまでの実践

CLILとは、「内容言語統合型」という訳語に表されている通り、社会、理科、音楽などの非言語科目の内容を、学習中の外国語を用いて統合的に学ぶ教育の総称である。元来ヨーロッパで人的移動と交流を促進する教育政策として発案され、複数言語を操ることができる科目教員が少なくないことも相まって、幼年から成年まであらゆるレベルの言語教育で広く取り入れられてきた。日本では2000年代頃から教育現場に紹介されはじめ、近年では特に英語教育への導入が進んでいる。内容（Content）、思考（Cognition）、言語コミュニケーション（Communication）、文化（Culture）の「4つのC（4Cs）」（Coyle, 1999）を基本理念とし、教員は例文を機械的に練習させたり科目内容を一方的に教えたりするのではなく、教材を提示し、タスクを設定し、支援しながら、生徒が協同して主体的に学ぶよう促す。例えば、大学におけるCLIL授業の例として、笹島（2020）は次のようなものを挙げている。

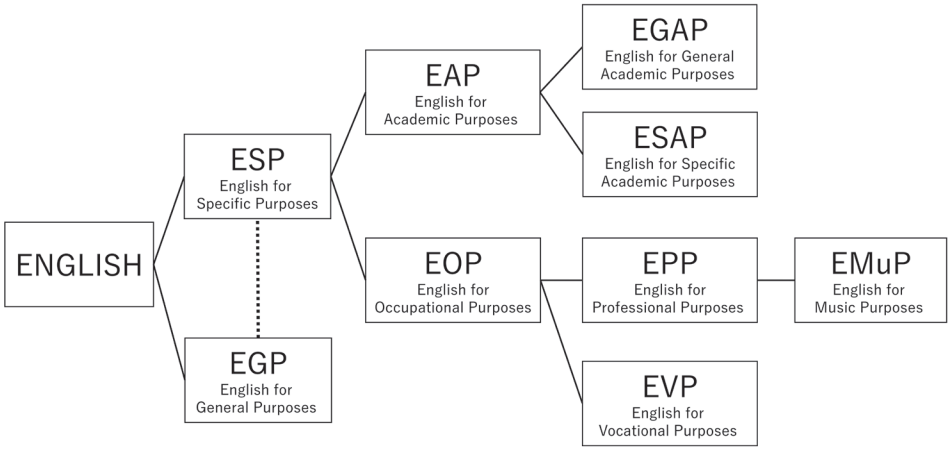
> 専門のトピックを扱ったCLIL
> 英語母語話者の授業で、専門分野の基礎的な内容を扱い、その分野で使う基礎的な用語や表現を、場面を通して見る、聞く、読む教材を使い、英語でやりとりしながら、クイズを出し、理解を確認する。学生は、語句と文法についての確認テストを受ける。学ぶ内容に関しては、知識を与えるのではなく、疑問を引き出し、意見を交換し、学習者自身が調べるようにする。

一方ESPは、専門職や、ある特定の活動、目的において必要とされる英語表現およびその学習を指す。CLILとESPは、オーセンティックな教材（学習する言語で書かれた学習科目関連の刊行物、映像、ウェブサイトなど）の使用や、どのような目的で言語表現を学ぶのかという学習者のニーズに焦点をあてる点において共通するが、CLILが言語学習（英語とは限らない）を前提としながらあくまで科目内容に重きを置くのに対し、ESPは英語そのものの学習を目的とする「外国語としての英語」（English as a Foreign Language, EFL）ないし「第二外国語としての英語」（English as a Second Language, ESL）の中の一アプローチである。

ESPは当初、戦後に各種分野の国際化が進展する中で、「一般的な英語」（English for General Purposes, EGP）とは対照的な、分野・職種に特化した英語学習への需要の高まりと共に始まり、その後年月をかけて発展してきた。Dudley-Evans & St John（1998）の区分によれば、ESPは更に「学術英語」（English for Academic Purposes, EAP）と「職業英語」

(English for Occupational Purposes, EOP)に分けられ、更にEOPは「専門職のための英語」(English for Professional Purposes, EPP)と「実務職のための英語」(English for Vocational Purposes, EVP)に分けられる。医療、法律、ビジネスなど将来専門職に就く学生が学ぶ英語はEPPに、既に実務に携わっている人々、あるいはその準備段階にある学習者が就職活動や面接をする目的で学ぶ英語はEVPに分類されている。カーク(2014)は、専門職のための英語(EPP)の下位カテゴリの一つとして、「音楽の目的のための英語」(English for Music Purposes, EMuP)を位置づけている(図1参照)。

図1. ESP理論による英語分類の例



カーク(2014, 図3, p. 42)に基き筆者作成

これまで日本の大学教育においては、教養科目の英語の授業をはじめ、医療、工学、観光などの専攻生のための英語の授業で、CLILやESPの実践が積み重ねられてきた。音楽大学においても、数は少ないものの、CLILやその類似アプローチ、ESPを取り入れた語学教育の実践報告がある。例えば宮谷(2011)は、言語学習の要素を強めた「ソフトCLIL」的な授業案として、楽曲をドイツ語で紹介し演奏する動画DVD制作の活動を紹介している。ここでは①インプット(ドイツ語で楽曲を調べる)、②インテイク(ドイツ語の思考プロセスで楽曲紹介文を書く)、③アウトプット(ドイツ語でスピーチし演奏する)、④プロダクション(楽曲紹介DVDを制作配布する)、⑤フィードバック(受講者と教員で講評し合い、ネイティブ教員のコメントを読むドイツ語読解能力)という流れの中で「話す・読む・聞く・書く」の4技能の習得が図られている。CLIL的効果が認められるのは特に上級レベルのクラスであるが、初級段階の学生に対しても、CLIL的な要素を加えることで、ドイツ語学習への意欲を高めることにつながると述べられている(宮谷, 2011, p. 147)。

カーク(2014)は、ESP理論の枠組みの中に「音楽の目的のための英語」(EMuP)を位置づけ、この指導を提唱した。外国人演奏者にレッスンを受ける、留学や公演のための手続き書類を作

成するなど、音大生の実践的な英語使用のニーズに即し、以下のような課題を出している：

- ウェブサイトからグループごとに記事を選び要約作成・発表する
- クラシック音楽情報サイトからコンクール情報を調べ、受けたいものについて原稿を作成し個人発表、教員が文章を添削する
- 英国のパブで突然演奏することになったという設定で、英語での自己紹介・曲紹介を考え、実際にプレゼンテーションする
- 好きな音楽家についてのエッセイ（200字）を書く
- 音楽に関する映画の鑑賞を通じ、様々な英語のアクセントを知り、日本語字幕と英語を比較する、また社会的背景について学ぶ

音楽専攻生に必要なジャンルの英語素材の提示によって、最終的には「自分で様々な情報収集ができる自立した英語学習者になるようにする」ことを目的として計画されており、このような模擬的なエクササイズは音大生にとって極めて有用である。

Hayashi & Miyajima(2018)は、英語の歌を教材として使用した内容重視型授業(Content-Based Instruction, CBI)について、音楽大学での実践を報告している。ヨーロッパで発展したCLILに対し、CBIは北米の移民向け英語教授法の中で展開した教育アプローチだが、CLILと同じく教科学習と言語学習を統合することを目指している。この授業実践では、学習に相応しいと考えられた英語のポピュラー・ソング７曲が予め選定され、学生は以下の活動を行う：①指定の楽曲を聴き、適宜インターネットで調べながら、ワークシートの問題（曲の背景、単語、歌詞の穴埋め、強勢の箇所、内容、感想）に取り組む、②ワークシートの解答をグループでシェア、議論し、作品を評価する、③自分の好きな歌を自由に選び、プレゼンテーションする。歌詞の文法やイントネーションは会話におけるそれと必ずしも一致しないため、理解が難しかったという声もあったものの、多くの学生が歌を通じて英語を楽しく学ぶことができたと答えている（Hayashi & Miyajima, 2018, pp. 175–176）。

原田（2012）は、夏休みの間に映画を英語音声で視聴し、「おすすめ度」、「映画の感想」、「印象に残ったセリフ」、「英語に関するコメント」をワークシートに記入するという映画レビュー課題実施の結果を報告している。音大生は特に音楽を基準に映画を選定している傾向があり、映画レビューであっても音楽に関する言及が多い（原田, 2012, p. 119）といい、音大生の持つ音楽への関心という切り口を活かす語学授業の有用性が示唆されている。

ここに挙げた音楽大学での過去の授業実践から、音楽大学における語学の授業では、音楽そのものに焦点をあてるCLILやESP的な活動が総じてよい効果をもたらすことは明らかであろう。

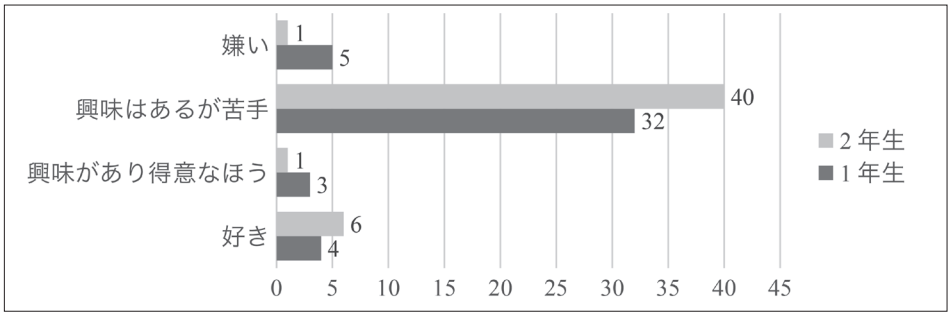
2.2 動機付けとしてのCLILとESP

CLILやESPを授業運営に取り入れることの大きな利点は、オーセンティックな教材の使用

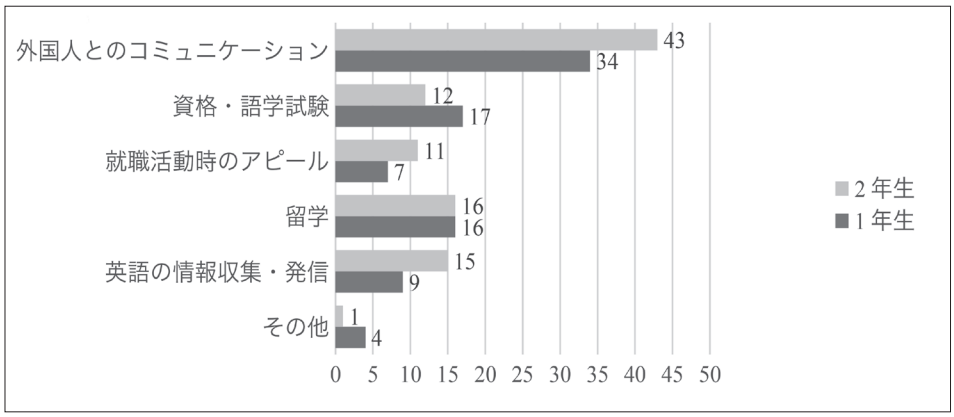
によって英語学習への動機を高めることができる点にある。大学生の英語学習に対するモチベーションの低さは、日本の高等英語教育に共通の課題であるが、音楽大学の場合、多くの学生が英語学習に対して強い苦手意識を持っている。一般的に音楽大学が入学試験において英語の得点を重視しないために、英語学習に対する意識が低いまま大学生活が始まることが多いこと（カーク, 2014, p. 39; Yamada, 2015, pp. 110–111）、また、音楽家のキャリア形成においてどのように英語が役立つのか、学びの必要性を見出していないケースも散見されること（Hayashi, 2016, p. 128; Yamada, 2015, p. 111）が先行研究において指摘されており、本学においても同様の傾向が見られる。

では、仮に本学においてCLILやESPに基づく英語の授業を実践した場合、これが学生の英語学習への動機付けにつながるであろうか。本学学生の英語に対する意識を知るためのサンプル調査として、2021年４月に筆者担当の「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」を履修する1年生２クラス44名、２年生２クラス48名を対象に実施したアンケート調査の結果を、グラフ1～3に示す。なお、学生の英語のレベルは実用英語技能検定（英検）３～準２級程度である。

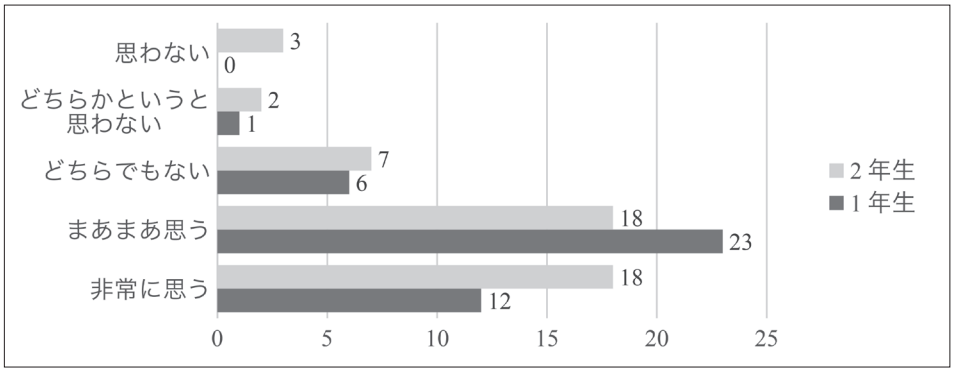
グラフ1. 質問「英語は好きですか？」に対する回答



グラフ2. 質問2.「英語を学ぶ目的や動機として、自分にあてはまるものを選んで下さい（複数選択可）。」



グラフ3. 質問「英語の授業が、特に音楽に関係する内容だと、取り組みやすいと感じますか？最もあてはまるものを選んで下さい。」



グラフ1～3から、1年生と2年生の間で英語学習に対する大きな意識の差はなく、同じような傾向を持っていることが伺える。「英語は好きですか？」の質問に対し、大多数が「興味がある」と答えていることは希望と言えよう。ただし、興味があると答えた学生86名のうち72名(84%)が「苦手」と答えており、英語学習に対する不安を取り除きながら、学生の興味関心を引き出すような授業運営をしていく必要がある。英語学習の目的や動機として最も多かったのは「外国人とのコミュニケーション」、次いで「留学」、「資格・語学試験」、「英語の情報収集・発信」、「就職活動時のアピール」であった。「英語の授業が、特に音楽に関係する内容だと、取り組みやすいと感じますか？」の質問に対し、肯定的な選択肢「まあまあ思う」「非常に思う」を選んだ学生は、全回答者92名のうち71名であった。少なくとも7割以上の学生にとって、音楽に関する内容を通じて取り組む英語の授業が、英語に対する苦手意識を軽減し、学習への動機を高めるきっかけになり得ることを示唆している。

このような背景をふまえ、音楽大学における英語の授業が向かう方向として、CLILとESPの考え方を取り入れた英語プログラム「音楽専攻生のための英語」(EMuS)を提唱したい。国内音楽大学における英語の授業シラバスを見てみると、一般的な英語科目(コミュニケーション、基礎英語など)ではCLILが、原典講読やライティングの授業ではESPとしてのEMuPが取り入れられる傾向にあるが、専門職としての音楽家に必要な英語のスキルや運用場面を考えるとき、CLILとEMuPのどちらか一方だけでは、やや物足りない。CLILでは音楽を切り口に様々な内容を主体的に学習することができるが、音楽家にはコンクール応募の志望動機を書いたり楽曲解説を書いたりと、専門実務的な英語様式の知識とモデルの模倣による訓練が必要な場合もある。また、CLILは内容が興味深いものであっても、英語の基礎力に乏しい学習者にとっては難易度が高くなりがちだ (Hayashi & Miyajima, 2018, p. 170)。だが 一方で、EMuPだけでは特定の目的に特化しすぎてしまい、学習者の幅広い学問的・職業的興味関心を養うという点には難がある。最終的には、日本の外国語教育に合わせて言語教育の比重を増した「ソフトCLIL」(Ikeda, Izumi, Watanabe, Pinner & Davis, 2021)を基盤とし、専門性の高い

場面で役立つ言語表現を学ぶEMuPの要素を取り入れながら、音楽を志す者に必要と思われる英語の力、学問的教養、専門分野の基本的知識を総合的な学習を目指して、EMuSの全体を構成していくのが妥当であろう。

3. EMuSをデザインする

3.1 ニーズ分析とジャンル分析

では、EMuSでは何が教えられるべきか。ESP理論におけるニーズ分析（Munby, 1978）とジャンル分析（Swales, 1990）の手法を借りて、EMuSの構成要素を考えてみる。ニーズ分析では、学習者が将来専門領域の職務において行う特定の活動を考え、そのためにはどのような言語能力が必要であるかを分析する。先に示した、筆者が受け持つ本学1・2年生対象のアンケート調査では、学生自身が感じている英語学習のニーズとして、以下のようなものが挙げられた：

表1. 英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ履修生アンケートより、英語学習へのニーズ例

カテゴリ	回答内容
コミュニケーション	スピーキング、リスニング能力を高めたい スラングやネイティブの話し方の特徴について知りたい 英会話で必要なことや大切なことを知りたい 会話の始め方や膨らまし方を知りたい ミュージシャンと接するときによくある会話を学んでいきたい 音楽に関するコミュニケーションの練習をしたい YouTubeなどで情報が集められるようになりたい
文法・単語	文法がとにかく苦手なのでしっかり解説して欲しい 基礎から学びたい ゲーム感覚で単語を学びたい
発音	カタカナ英語を直したい 正しい発音を身につけたい アクセントやイントネーションを正しく学びたい
リーディング	長文をどう読んでいけばいいか知りたい
ライティング	できるようになりたい

少ないサンプルではあるが、このニーズ分析から得られた結果をふまえ、EMuSプログラムに含めたい教授内容について考えてみよう。学生の側からのニーズとしては、コミュニケーションの能力を伸ばしたいという声が最も多かった。音楽の場でのコミュニケーション方法を知りたいという意見はもちろん、音楽以外の日常会話から込み入った議論までできるようになれたらいいと考える学生もおり、一般的な英語（EGP）と特定の目的のための英語（ESP）双方の英語へのニーズがあることが分かる。また、基礎文法を学び直したいという希望も多く見られ、どのように文を組み立てたらよいか分からないために発話ができないという問題を抱えている

学生が少なくないことから、EMuSプログラムにおいては言語指導がやはり外せない。音大生で特に留意すべきと考えられるのは、発音の指導である。音大生は聴覚に秀でる者が多いのもあって、歌を歌ったり聴いたりすることを通じて発音を磨いたことがきっかけとなって、発話への自信をつける例が少なくない。特に声楽専攻の学生にとっては、アメリカ英語とイギリス英語の違いを知り、歌い分けられることは重要で、これがしっかり身につけば彼らのレパートリーの拡大にも繋がるわけであるから、ぜひEMuSでは取り上げたいところである。

表1で示された学生のアンケート結果からは、オーラル・コミュニケーションを練習したいという声が多かった一方、リーディングやライティングに対するニーズは少なかった。英語を学ぶ目的や動機として「留学」「資格試験」と答えていた学生は少なからずいたが、出願書類の準備や語学試験、留学先での授業など、ライティングを必要とする機会が多くあるということが必ずしも認識されていないのかもしれない。将来の仕事や社会生活において必要なスキルが認知されていないケースは、他大学でも認められている（中西・林・内野・大濱・小林・佐久間, 2008, p. 67）。学生のニーズに応えるだけでなく、キャリア形成の中でどのような場面で英語が必要になるかを踏まえてEMuSプログラムを構築し、学習者に職業・社会的ニーズを認識させることが必要だ。

ここで参考にしたいのは、ジャンル分析のアプローチである。ニーズ分析から発展したジャンル分析では、学習者視点からのニーズだけでなく、社会のニーズに注目し、学問や職業といった専門領域の集団「ディスコース・コミュニティ」における特定の「言語コミュニケーションのあり方」（野口・神前, 2000, p. 105）を「ジャンル」と呼んで、この特徴を分析する。EMuSの場合、ディスコース・コミュニティは音楽家、ジャンルは音楽の現場やキャリア形成の過程で繰り返し行われてきた事象、すなわちレッスンを受けたり、リハーサルをしたり、楽曲解説を書いたり、といったイベントにおいてパターン化された言語表現である。カーク（2014）のEMuPにおけるジャンル分析のデータや、筆者や周囲の音楽家の経験、学生のニーズをもとに同定したジャンルの例を、表２にまとめた。Paltridge（2006）を参考に、「話す・聴く」の能力に関わる「会話のディスコース」と、「書く・読む」の能力に関わる「文書のディスコース」とに分けて示している。

表2.「音楽家」のディスコース・コミュニティにおけるジャンルの例

	ジャンル
会話のディスコース	• 音楽作品の特徴や演奏のテクニックについて話す • 演奏について批評する • 聴衆や審査員に向かって挨拶する、演目について話す • 友人と演奏会を企画する • 演奏会や公演の演出について議論する • リハーサルを進行する、指示を出す • 練習室や演奏会場の予約をする • 演奏・試験会場を下見する、案内する

	• 演奏会・講習会後のレセプションで参加者と対話する • 自分の音楽歴や出自、文化的背景について話す • 取材インタビューに答える
文書のディスコース	• 履歴書、オーディションなどの出願書類を書く • 留学先に問い合わせる • レッスン、リハーサルなどをスケジューリングするためにメールを書く • SNSでフォロワーとやり取りする • プログラム・ノートを書く • 演奏会のレビューを書く • イベントの紹介文やコピーを書く • 歌詞を翻訳したり、英語で書いたりする • 契約書を読み理解する

3.2 EMuSの教授内容と手法

前項のニーズ分析・ジャンル分析を参考に、EMuSで養成するべき専門分野の能力を考える。まず、学生のニーズ分析とジャンル分析で得た「会話のディスコース」からは、コミュニケーション能力、特に音楽について描写・議論したり、練習を段取りしたりという場面でのスピーキング・リスニング力を伸ばすという学習目的が浮かび上がる。コソボの音楽院からヨーロッパの講習会に参加した学生たちについて調査した Gashi & Gashi(2020)によれば、彼らがサマースクール中最も苦戦したのが、他の様々な地域出身の参加者たちとのオーラル・コミュニケーションであったという。日本や東アジアの国々の学生にも恐らく同じような傾向があることは、経験上想像がつく。音楽の現場でのコミュニケーションは、音楽用語が自在に使え、かつ演奏や作品についての自らの考えが表現できなければ成り立たない。EMuSでは、実際の英語でのマスタークラスの映像などを素材にして、講師がどのような質問をしているか、それに受講生がどのように答えているかを知り、自分が受講生であったらどのように答えるかをグループでシェアする、英語での模擬レッスンを実施するなど、学習者のレベルに合わせつつ、実践的かつインタラクティブな会話練習を取り入れたい。

「文書のディスコース」では、SNSの口語的なやりとりから、教員や学校への問合せのメール、実務的な契約書や履歴書、学術的なプログラム・ノート、文語的な歌の歌詞まで、様々なテクストのスタイルを学ぶという学習目的が見いだせる。オーセンティックな教材を使いそれぞれのジャンルにおけるモデルを提示し、該当テクストで用いられている語彙や文法、スタイルの特徴を確認しながら、これに従って自分なりの文書を書いたり、履修生同士でピア・レビューを行ったりという活動が効果的であろう。つまり、授業を終えると、実際に海外の講習会に参加したり、英語の歌詞を書いたり、自分の好きな海外のミュージシャンとSNS上でコミュニケーションしたりしたいと学生が思ったときに、直接使える文書やサンプルが手元にある、という状態を目指して授業を設計するのである。

以上はESP理論的に考えた教授内容であるが、EMuSにはこれだけでなく、CLILの「4つ

のC」、特に‘Culture’について学び、考える要素がほしい。日本を含む東アジア出身の音大生は、西洋文化を身近に育ってきていることもあって、「アジア人として西洋音楽を学んでいる」という意識はあまりないように感じる。しかし、グローバル化とはいっても、国際的な音楽の現場で演奏や創作を学び、仕事をするとき、「アジア人音楽家」という自らが逃れられない文化的背景と強烈に直面したり（あるいはさせられたり）、東西文化間の思わぬ軋轢に遭遇したりすることは少なくない（吉原，2013）。EMuSでは、自国の文化、世界の様々な文化の特色や違いを知り、自らの音楽家としての、あるいはグローバル市民としてのアイデンティティを見出すきっかけになるような、広く文化社会と音楽の関わりについて学べるトピックも用意したい。

3.3 EMuSプログラム素案

ここまでの議論をふまえ、実際のEMuSはどのような内容になるか、コース・シラバスのアウトラインを作る体でトピックを考えてみる。現段階では学年やレベルを細かく設定せず、音楽と関連付けて英語の力をつけたいと希望する音大生に向けた内容で、授業の枠組みを考えてみたい。

この授業を通じた「ねらい」は、以下の通りである：

1. 音楽作品や演奏について、基本的な音楽用語を使って描写したり、意見交換したりできる
2. 留学や海外のコンクールについての情報をリサーチすることができる
3. 履歴書、申請書、出願書類など、音楽の勉強や仕事に関わる書類が書ける
4. 曲目解説やレビューなど、音楽についての短い文書の書き方が分かる
5. 地域や時代によって英語の発音が異なることを理解する
6. 音楽と文化・社会の様々な関わりについて、文章や映像を通じ関心を深める
7. 社会的、学術的、職業上の目的に応じたスタイルでのコミュニケーションができる
8. 協同して英語でのプロジェクトに取り組むことができる

構成は、大学生向けの英語の教科書で一般的な全12課である。前半6課では、日常のコミュニケーションにも応用できる一般的な表現と音楽表現を統合的に学びながら、留学準備プログラムの役割も果たせるような、タスク・ベースで実践的な内容を扱う。後半6課では、より高度な英語表現や科目内容にも対応できるように、アカデミックなコンテクストで書かれたスクリプトを多用し、知識のインプットや文法の確認、ライティングやプレゼンテーション、ディスカッションにも比重を置いて構成する。

また、教員には音楽の専門知識の必要はなく、ごく一般的な音楽の知識があれば、英語教員であれば誰でも教えられる、という前提で授業内容を考える。音楽史や音楽理論の章があったり、楽曲解説を書くといった専門科目的なエクササイズもあるが、あくまで英語での入門的学習にとどめ、高度な内容は要求しない。CLILの「4つのC」とESPのニーズ・ジャンル分析

を踏まえ、場面シラバス（「レッスンで」など）、話題シラバス（「ポピュラー音楽」など）、タスク・シラバス（「コンサートを企画する」など）を織り交ぜながら、オーセンティックな教材を使ったエクササイズの実施を念頭におく。

以上を基本方針として構成した内容をまとめたものが、以下の表3である：

表3. EMuSの構成案

単元	学習内容、タスクの例
1. 音楽と英語	• 履修の目的、目標、効果的な英語勉強法について話し合う • 留学中の音大生、教員、卒業生からのメッセージを読み、音楽を学ぶ上で必要な英語について知る •「まずは覚える音楽用語・表現一覧」配布、現時点でどのくらい知っているか、穴あきクイズ、実際の用例を映像や文章で確認する • IPA記号の基本を確認し、英語の歌を歌う
2. 音楽と職業	• 演奏家、作曲家、教育者、プロデューサー、エンジニア、音楽療法士など、音楽に関係する様々な職種を紹介するテクストや映像から語句や表現を学ぶ • 自分が興味を持っているアーティストが、どのようにキャリアを築いてきたかをリサーチする • 自分の作品や演奏のデモを音楽制作会社に送りたいが、どのようなメールを書けばよいか、アイディアを出し合い、モデルに従って自分のメールを書いてみる • オーディションの映像を見て審査員とのコミュニケーションの様子を観察し、表現を書き取ってロール・プレイで練習する • 自分はどのようなキャリアを目指しているか、それにはどのような準備がこれから必要か、グループで話し合い、各自原稿にまとめ、プレゼンテーションする
3. 留学	• 留学したいと思うか、留学のメリットとデメリットは何か、グループで話し合う • どのようなタイプの留学があるか、自分の大学でも留学の制度があるか、調べる • 自分が行ってみたいと思う留学のプログラムを選んで、どのような準備が必要か、どうしてこのプログラムを選んだか、プレゼンテーションする • 留学生活の様々な場面を扱ったスクリプト・音源を用い、自己紹介、トラブル対応、病院での診察、交通機関の使い方、時間の確認、チケット予約、パーティーでの会話など、日常生活にも応用できる表現を学ぶ
4. レッスンとリハーサル	• レッスンの申込みに関する表現を学び、実際にコンタクトを取りたい先生を想定してメールを書く • スクリプト・音源から、レッスンで使える様々な表現を学ぶ • 実際のレッスンやリハーサルの映像を視聴し、単語・表現を書き取る • いくつかのタイプのレッスンやリハーサルを想定し、ロール・プレイを行う（一対一、指揮者と合唱、室内楽など） • 振り返りのレポートを提出

5. コンクール	• 出願に関係する語句や表現を学ぶ • ウェブ上でコンクール情報を探し、自分の受けたいコンクールの申込み手順や、準備する内容をまとめ、グループでシェアする • モデルに基づいて、プロフィール、志望動機の書き方を学ぶ • コンクールに参加するため、どのような交通手段をとり、どのホテルに滞在するのがよさそうか、調べてまとめる
6. 演奏会	• 演奏会を企画する音大生たちのスクリプト・音源から、会話表現を学ぶ • 様々な国の様々な演奏会の形、音楽文化と地域コミュニティとの関わりについての映像を視聴し、自分たちはどのような地域との関わりができるか、グループで話し合う • グループに分かれ、最終週の発表会に向け、ソルフェージュのクラスで使っている視唱曲集から演奏曲目を選曲、アレンジの可能性、練習のスケジューリングなど、英語で相談する；曲目紹介を作成し、グループで発表できるよう準備する
7. 西洋音楽史と音楽理論	• ある作曲家について説明する音源を聴き、誰かを当てる • 時代区分や作曲家、作品の様式、形式を描写する表現を学び、文法を確認する練習問題を解く • 自分の好きな作曲家や作品についてグループで話す • 「なぜ歴史や理論を学ぶのか」をテーマに書かれた易しいテクストを読んだり映像を見たりしながら、教員がクラス全体の議論をリードする • 授業で学んだアイディアや表現を用いて「歴史や理論を学ぶ意味」について短いリアクション・ペーパーを書く
8. ポピュラー音楽	• 様々なポピュラー音楽の音源を聴きながら、ジャズ、ロック、ボサノバ、ヒップホップ…などジャンルを答え、知っていることについて話す、リズム・メロディ・ハーモニーの特徴を描写する • ポピュラー音楽の成り立ちや発展、消費について、テクストや映像を利用して、単語や表現を学ぶ • 歌詞を用いて表現、文法を学ぶ、英米の発音の違いを確認して、実際に歌ってみる • 「クラシック」と「ポピュラー」の関係について話し合う
9. 映画音楽	• 映画音楽にはどのような役割があるか、ディスカッションする • 映画の部分を抜き出して、音楽がどのような効果を出しているか描写する • サイレントからトーキーへ、映像と音楽の関わりについてテクストや映像で学ぶ • 任意の作品を鑑賞し、台詞や主題歌などから英語表現を学ぶ
10. 音楽とメディア	• ‘media’の語の意味を確認しながら、楽譜、レコード、CD、インターネットといった音楽におけるメディアとその歴史的変遷、それぞれのメディアがもたらした産業の転換について学ぶ • インターネット時代の音楽のあり方について書かれた文書を読み、これからの音楽文化がどのように変わっていくか、どのような問題があるか、話し合う • SNSでの音楽家の発信や演奏会の宣伝には、どのような工夫が見られるか、課題はあるか、自分が気になった例を提示しながら、プレゼンテーションする

11. 世界の音楽	• 民族音楽、楽器、声、文化、儀礼などをテーマとするテクストや映像から、語句や文法を学ぶ • 音源を聴き、音楽的な特徴を描写する • 民族音楽や民謡と、古今の芸術音楽との関わりについて学ぶ • 西洋音楽を学ぶ自分たちにとって、世界の音楽を知ることにはどのような意味があるか、具体例をふまえた主張をグループごとに考え、プレゼンテーションする
12. アジア人音楽家	• アジア人音楽家の留学・就労体験談を読む • アジアの国がテーマになっている音楽作品の例を出し合い、西洋音楽とオリエンタリズムの関係について学ぶ • 近年のニュースから、音楽の分野での異文化衝突の例を探し、話し合う • アジア人が西洋音楽（あるいはその逆）を演奏することに難しさはあるか、あるとすればどのようなことか、逆に利点はあるか、グループごとにプレゼンテーションする

以上、本稿で論じてきた音大生に求められる英語力をふまえて、EMuSの素案を考えてみた。EMuSで目指すのは文法シラバスでなく、内容がベースとなっているため、レベルによっては実施がかなり難しくなる可能性もある。しかし基本的には、少なくともこのようなトピックに基づいた授業を展開することは、どのレベルであっても可能ではないかと考える。例えば、上級クラスでスクリプトを3つ読むところを、初級クラスでは1つに絞って単語や文法を徹底的に練習する、ディスカッションでは日本語も交えて行い、分からなかった英語の表現を教員がフォローして教えるなど、レベルに応じて柔軟に対応すればよい。現在受け持つ英語クラスの中で、この素案に基づくエクササイズを実際に試しながら、より具体的な実現可能性を探っていきたい。

なお、この素案は音楽を専門としない英語教員が主体となって教えることを前提としているが、既に指摘されているように、英語の授業改善は、語学教員と専攻科目教員との連帯のもと検討されることが望ましいと思われる（中西・林 他，2008）。英語の授業実施にあたってよくある悩みとして、英語の基礎力がないことと並んで、学生自身のアイディアがなかなか出てこない、背景知識がないために答えが思い浮かばない、といった問題がある。だが、専攻科目で学んだ内容を英語の授業で再び学習することになれば、事前に知識が日本語で入っているために、英語の授業でも内容を予測できたり理解できたりすることが増え、学生が自信をもって英語で発言できる回数が増えるかも知れないし、同じトピックを異なるアプローチで学ぶおもしろさも感じられるのではないか。また、英語で授業ができる専攻科目教員をゲスト講師として招き、英語教員と共同で授業を実施するような機会があれば、学生にとっては大きな学習の刺激となるだろう。そこまで密な連携がとれなくとも、学生の必修科目の内容を英語教員が把握し、それをごく一部でも英語の授業に反映させていくという意識をもって日々の授業準備をするだけでも、EMuS構築へ向けた一歩になるはずである。

4. 結論と今後の課題

本稿では、CLILとESP理論における言語教育の方法論を参照しつつ、新たな音大生向け英語プログラムEMuSを構築する可能性について論じた。オーセンティックな教材を用いながら、音楽の現場で使える表現を学び、音楽をとりまく様々なトピックや自らのキャリア形成について考え知る機会を提供し、大学生に相応しいアカデミックな英語学習の導入ともする、というのがEMuSの骨子である。

本稿に示した構成案に基づいた授業を行うにあたっては、実際には様々な壁がある。まず、現時点でベースとなる教科書があるわけではないので、オーセンティックな教材を選定したり、場合によっては独自の教材を作成したり、一から授業を作り上げなければならない。また、EMuSで学ぶ英語がある程度の汎用性を持てるように、どのように語彙や表現を選んで学習内容やタスクを設定するか、具体的な授業設計にあたっては今後より詳細な検討を重ねていく必要がある。これは一教員の手に負えるものではなく、英語の教員同士での勉強会や、大学横断的なEMuS研究のコミュニティを作るなど、教員間のネットワーク整備の必要性を感じている。一年間分のカリキュラムを練り上げるには時間と労力を要すると思われるが、それでも現行の授業内で少しずつ教案を試しながら、継続して取り組んでいくべきであろうと考える。

前項でも触れた通り、EMuSはその内容を鑑みて、英語教員だけはなく専攻科目教員の協力を仰ぎながら内容を検討するのが効果的であると思う。英語の授業で扱う内容が音楽に関係するからといって、必ずしも学生の英語力や学習意欲の向上につながるわけではないという意見もあるだろうが、少なくとも現状よりは動機付けにつながる可能性があることは、本稿で示した通りである。日常会話や資格試験のための英語であれば、書籍や動画、オンライン・レッスンが充実している今、個人でいくらでも学ぶことができる。それに対し、音楽大学における現在の英語の授業が「音楽に関係する内容なら英語を勉強しようという気持ちになれるかもしれない」と思う学生の思いに必ずしも応えられていないという状況には、音楽を学んだ英語教員としては歯がゆい思いがする。音楽大学の英語の授業は、第一に音楽分野でのキャリアを目指す学生にとって有用な英語習得の機会となるべきではないだろうか。EMuSの構築を考えるとき、それは最終的には音楽家育成に関わる人々が連帯して作り上げる、クロス・ファカルティ的な授業設計へと向かっていくように思われるのである。

（本学講師＝外国語（英語）担当）

参考文献

カーク美佳（2014）.「音楽大学におけるESP（English for Specific Purposes）理論に基づいた英語教育への考察」『エリザベト音楽大学研究紀要』，第34号，39–47.

笹島茂（2020）.『教育としてのCLIL』．東京，三修社（Kindle iOS版）.

中西千春・林千代・内野泰子・大濱えり・小林和歌子・佐久間昌子（2008）.「国立音楽大学で効果的に英語指導をするために」『国立音楽大学研究紀要』，第43集，59–62.

野口ジュディー・神前葉子（2000）.「薬学部におけるESP（English for Specific Purposes）教育：ESPアプローチとその効果」『武庫川女子大紀要（自然科学）』，第48集，105–111.

原田知子（2012）.「音大生を惹きつける映画：6年間の英語授業課題に基づく分析」『武蔵野音楽大学研究紀要』，第44号，113–128.

宮谷尚美（2011）.「音大ドイツ語上級授業におけるCLIL的試み」『国立音楽大学研究紀要』，第46集，145–149.

吉原真里（2013）.『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか？ ―人種・ジェンダー・文化資本』．東京：アルテスパブリッシング.

Coyle, D. (1999). Supporting students in content and language integrated contexts: planning for effective classrooms. In J. Masih (ed.), *Learning through a foreign language – models, methods and outcomes*. London: Centre for Information on Language Teaching and Research (CILT), 46–62.

Dudley-Evans, T. & St John, M. J. (1998). *Developments in English for Specific Purposes: A Multi-Disciplinary Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.

Gashi, B. & Gashi, F. (2020). The English Communication Needs of Music Students and ESP Curriculum Development at BA Level [Paper presentation]. The 8th International Conference on Modern Approach in Humanities, Rome, Italy. Retrieved from https://www.dpublication.com/wp-content/uploads/2020/05/29-990.pdf.

Hayashi, C. (2016). Music College Students' Motivation for Learning English: A Preliminary Study. *Kunitachi College of Music Journal*, 52, 123–134.

Hayashi, C. & Miyajima, M. (2018). Content-Based English Lessons with Songs. *Kunitachi College of Music Journal*, 53 (1), 169–177.

Ikeda, M., Izumi, S., Watanabe, Y., Pinner, R. & Davis, M. (2021). *Soft CLIL and English Language Teaching: Understanding Japanese Policy, Practice and Implications* (Routledge Series in Language and Content Integrated Teaching & Plurilingual Education). London & New York: Routledge [Kindle iOS version].

Munby, J. (1978). *Communicative syllabus design*. Cambridge: Cambridge University Press.

Paltridge, B. (2006). *Discourse Analysis: An Introduction*. London & New York: Continuum.

Swales, J. (1990). *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings* (Cambridge Applied Linguistics). Cambridge: Cambridge University Press.

Yamada, S. A. (2015). The Impact of Participation in an Extracurricular Seminar on English Student Motivation: Showa Music University's English Clinic's Case. *Bulletin of Showa Academia Musicae*, 34, 110–124.